

の間で暴力があったとしても子どもに対してはやっていないから、DVのことは忘れて子どものために面会交流させればいいじゃないか、ということです。しかし、「私さえ我慢すればこの子から家庭を取り上げないで済むと思って、ずっと我慢してきた。でも、子どもまで虐待された。夫婦の関係が悪い形で子どもに出ているから、子どものためにならない」と離婚をしても、面会交流で暴力的な関係が続いてしまうこともあります。

3、暴力を受け続けると

DVの加害の本質は、支配とコントロールです。被害者は、いろんなところでどういう難癖がつくか分からず、臨戦態勢で構えなくてはなりません。加害者のちょっと優しい気持ちにほろっとすると、やっぱり後ろから蹴られるみたいなジェットコースターのようなことが起こるので、被害者は情緒不安定になりがちです。そうすると、「あの人の言うことは信じなくていいよね」となるわけです。ここがすごく難しいところで、感情的に不安定になったり、言うことがとりとめなくなる理由は、ずっと暴力にさらされてきたからなのだけど、加害者のほうが、外では妻をかばっている良い夫にみえたりします。夫がめちゃくちゃでうまく生活が回らない時に、妻が「ああしなさい、こうしなさい」と言う様子からきつい人と見られて、「あんな強い妻に頑張ってるよ」というように、被害者が加害者に見えて、加害者が被害者に見えるということもあります。

4、暴力でコントロールされる被害者

野田の事件で問題だと思うのは、夫の意向で妻の実母ですら連絡がとれなかったということです。DVでは、家族・友人との連絡を絶たせて被害者を孤立させるということが行われます。また、娘への虐待に母親が加担していたと言われますが、DVで心を支配されている状態だから、母親が父親に迎合して逆らわないというのはDV被害者あるあるの基本です。もし母親が父親に逆らって娘をかばったことがばれたら、どのような報復がまっているのかという視点を持って考えると母親を責めることは出来ません。裁判官は、母親に「心愛ちゃんが頼るべきはあなたしかいなかった。今後は社会の中で、心愛ちゃんや今回のことを振り返って反省の日々を過ごしてほしい」と言っていますが、なぜこんなことが起こったのか、母親に反省を求めるべきことなのかと思います。何で児童相談所が保護できなかったのか、何でDVと言われたときに保護できなかったのか。さまざまところで、私たちの社会が彼らに手を差し伸べなかったことが問題で、母親の問題だと矮小化してはならないのではないかと思います。

5、予防の必要性

日本のポスターには通告系のものが多いですが、もう少し予防に力をいれてもらいたいと思います。誰にも知られずに相談できますから、勇気を出して気軽に相談してください、というようなものであったら、もう少し救われるのではないかと思います。例えばドイツだと、親権という概念がなくなっただけではなく、親がその子の発達のために援助が必要な場合に社会的支援の請求権を有するという法律があるそうです。親が支援される権利があるのです。

虐待に関しては、父親が育児をするようになってきて、父親の加害割合が増えてきましたが、やはり一番多いのは日常的に接している母親なんですね。殺人の場合は、望まない妊娠で子どもを産んで殺してしまうというようなケースも多くあります。

子育てが大変で、やむにやまれず虐待に至ってしまったという人達がたくさんいます。通報をして子どもを一時保護したり、養護施設に入れたら解決したかという、全く問題解決にはなっていないですよ。だから、虐待を予防するというように今世界的な潮流になっているので、日本でも是非そうなるといいなと思います。

※野田の事件

「野田小4女児虐待事件」…2019年1月に千葉県野田市で起こった虐待事件。